



特集

地域に発信する山口大学



公開講座の現状と課題

エクステンションセンター教授 長畑 実

拡大するエクステンションセンターの取り組み

国立大学が法人化されて1年が経過し、国立大学法人の改革・開放に対する国民の関心はますます高まっています。地域基幹総合大学として教育・研究と並ぶ第三の使命として地域貢献を高らかに宣言した山口大学においても、県内を中心に各界各層から注目が集まっており、「全入時代」を目前にした現在、大学間競争に生き残りさらに発展していくために、地域から支持される創造的な地域貢献事業の構築が求められています。

山口大学では地域貢献の組織的総合的取り組みを推進する窓口としてエクステンションセンターを2003年4月に開設しました。開設後短い期間ではありますが、地域ニーズの調査研究（報告書発行）、公開講座、出前講義、高大連携事業、学部等の地域貢献事業支援、4市（山口市、宇部市、防府市、周南市）教育委員会生涯学

習課との連携など多彩な取り組みを進めてきました。また、秋芳町観光協会や阿武町農業青年協議会、防府青年会議所など地域における諸機関・団体との協働も拡大しつつあります。

16年度公開講座の現状と課題

ここでは、16年度公開講座の現状と今後の課題について報告させていただきます。16年度は17の講座を開設し、329名の方に受講していただくことができました。各講座終了後の受講者アンケートを集計したところ、①受講者の3分の2が女性であること、②年齢別では50歳代以上が全体の6割を占めているが、30歳代、40歳代で合わせて3割に達しており、壮年層の参加も多くなっていること、③はじめての受講者が6割、3回以上のリピーターが25%を占めていること、④講座の満足度は8~9割と極めて高いことなどの特徴が見ら

れ、地域から大きな期待が寄せられていることが理解されました。

16年度の公開講座の取り組みにあたって重視したことは、センターとして積極的な広報活動を行うことでした。過去の講座受講者の名簿からデータベースを作成してダイレクトメールを確実に発送することをはじめ、年間3万枚のチラシを県内に広く配布する計画をたて、自治体関連、各種団体など735件の配送先をリスト化するとともに、人の多く集まる場所に配置できるよう郵便局・銀行の窓口、ホームセンター、スーパーなど新たな配布先を開拓しました。同時に、エクステンションセンターのホームページでも詳細な情報を提供しました。こうした大規模な広報の結果、受講者の情報入手先では「募集チラシ」が最も多く、次いで「大学からの案内（ダイレクトメール）」「大学のホームページを見て」「知人・友人から」となっており、明らかな効果を上げることができました。



また、従来にない新しい体験型講座として「小麦栽培から始めるパンづくり」講座が開設されたことも特徴です。この講座は、食の安全・安心、地産地消を求める住民のニーズの高まりを背景として、農学部、附属農場を中心に県立大学、県農業試験場等の外部研究機関と地元産のコムギを使ったパンづくりを目指す地域パン研究会との連携によって構築されたもので、定員を上回る受講応募があ

り、大きな反響を呼びました。また、地域の運動指導者を対象とした「中高年の健康づくりのための運動指導講座」も定員を上回る受講応募があり、指導者養成を目的とした専門職対象講座の重要性が確認されました。

こうした16年度の成果の上に、17年度には防府市において市（教育委員会）から会場の提供を受け「山口大学公開講座」を2講座開設することが決まりました。エク

ステンションセンターでは今後、一般教養をはじめ、職業的な専門性という視点に立った特別講座など職業人、卒業生を対象とした講座の開設や自治体・他大学との一層の連携を進めることを通して、魅力ある公開講座、特別講座などの地域貢献事業を構築していきたいと考えています。



「小麦栽培から始めるパンづくり」講座の実習風景



公開講座の受講風景



産学公連携における 包括的連携協力について

地域共同研究開発センター長 清水則一

はじめに

地域共同研究開発センターは、山口大学（学）と企業（産）や公的機関（公）との共同研究や技術開発を推進し、その成果によって、科学技術の振興と地域社会の発展に貢献することを目的として活動しています。さらに、共同研究支援だけでなく、学外の人々を対象とした技術研修会、特別講演会、各種セミナーの開催、技術相談など、さまざまなサービス業務も行っています。ここでは、最近話題の地域の企業や自治体との包括的な連携協力について紹介します。

包括連携とは

これまでの産学連携では、共同研究や受託研究は、大学教員と企業担当部署とがそれぞれに連携して実施していました。包括連携とは、大学と企業のトップ同士が覚書を交わすなどして、組織と組織が責任を持って、研究や技術開発はもちろん、様々な交流や人材育成など、幅広く連携協力するものです。

国立大学から国立大学法人となり、いわば、組織として一人の人格を持ったわけですから、大学は

ひとつの組織として一体となり、教育、研究および社会に貢献することが社会的に期待されています。包括的連携協力はまさにそのような社会の流れにかなうものとして注目されています。

包括連携の狙い

山口大学は、地方大学としては他に先駆けて、宇部興産（平成16年4月）を皮切りに、トクヤマ徳山製造所（平成16年10月）、山口銀行（平成16年11月）、宇部市（平成16年11月）といった地域の企業や金融機関、自治体と相次いで包括的連携協力協定（包括連携）を締結しました。包括連携は組織間の協力ですので、計画性のある効率的な活動展開や、実行のスピードアップが大いに期待されます。包括連携を結びました宇部興産およびトクヤマ徳山製造所、山口銀行、宇部市とは、立地の近さを生かして古くから交流し、これまでも個々の分野で多くの成果と強い信頼関係が培われてきました。このたびの包括連携によってそれぞれの組織の総合力の充実に繋げていくと共に、山口大学としてもこれらの包括連携を通して、現在、全国トップレベルにある産学連携力、特徴ある研究・教育力を

活用し、広く地域社会の活性化に貢献していくものです。

宇部興産との包括連携

宇部興産とは、二酸化炭素の排出量の削減など地球規模の環境問題への対応も見据えた共同研究や人材育成、人材交流などに幅広く取り組んでいます。共同研究は、本センターに所属するコーディネーターによる、企業のニーズと大学のシーズのマッチング活動を経て研究テーマを設定し、新しく構築した共同研究マネジメントシステムのもとで研究を推進しています。さらに、包括連携を一層深めていくための技術交流会、工場視察、双方での講演や講義、宇部興産知財担当者による知財研修、技術経営（MOT）教育教材の作成、国家プロジェクトへの共同応募などこれまでにない幅広い連携を推進しています。

トクヤマ徳山製造所との包括連携

トクヤマ徳山製造所とは、製造現場が抱える製造技術力強化や安全、環境等に関する共同研究、人材育成、人材交流などに積極的に取り組んでいます。新しい展開と



して、トクヤマ製造所の課題について共同研究としての可能性検討会やマッチング活動で検討し、研究開発とともに製造現場の課題解決につながる新たな研究テーマが取り上げられました。さらに、工場視察、双方での講演会、MOT教材作成、若手教員との意見交換会など幅広い交流を深めています。

山口銀行との包括連携

山口銀行とは、これまでに寄附講座の開設（本センター「産業創造部門」）、異業種交流組織の運営、講演会の開催などで協力関係を築いてきました。新たに山銀の支店網を活用して、技術相談や共同研究を広げ、地場企業やベンチャー企業の発展・育成につなげていくことにしています。さらに、行員による大学での金融の講義や

学生のインターンシップなどの人材交流、双方が進めている東アジア戦略の展開にも取り組むことにしています。また、山銀が開催する交流会や講演会を通じて地域企業との連携、山銀を介して技術相談等を行っています。

宇部市との包括連携

宇部市とは、地域産業の創造・育成、地球温暖化対策など環境保全、中心市街地の活性化などのまちづくり、地域の保健・医療・福祉の充実などを目指して活動しています。市職員（次長）が産学官連携コーディネーターとして本センターに出向し、市政に係る各種研究会や国際環境協力シンポジウムなどのフォーラム開催、中小企業の新技術・新商品開発に対する支援をしています。また、さらに環境共生都市の実現を図るため

設立された宇部市コンビナート省エネ・温室効果ガス削減研究協議会の活動などを共同して進めています。さらに市長と若手教員とが膝を突き合わせて意見交換する機会や、そこから地域活性化の新しい展開を探っていくとするチャレンジな交流会も始まっています。

学生諸君へ

産学連携というと遠い存在のように感じるかもしれません。本学は、他の大学に比べても企業と連携した共同研究が多く（それだけ期待が大きいということです）、非常に身近なものです。ここで紹介した包括連携でも本学学生諸君が多数活躍しています。研究を進めるだけでなく、社会や企業の様子を学ぶ絶好の機会でもあります。



地域共同研究開発センターホームページ
<http://www.crc.yamaguchi-u.ac.jp/>



国際協力銀行 (JBIC: Japan Bank for International Cooperation) との協定締結と国際貢献

国際企画課長 岡崎房述

中期目標

法人化を機会に、山口大学はこれまで培ってきた東アジアとの国際交流と人材育成を発展させ、国際協力銀行や国際協力機構（JICA：Japan International Cooperation Agency）などの政府開発援助（ODA: Official Development Assistance）のプロジェクトに積極的に協力することを中期目標の一つとして掲げています。

協定締結

法人化初年度の昨年5月、山口大学は国立大学法人として初め

て、国際協力銀行と海外経済協力業務に関する協力協定を締結し、東アジアを中心に現地調査や人材育成への協力と連携を進めていますが、今後も国際協力銀行が実施する円借款事業や各種調査のプロジェクトに積極的に協力し、教育研究領域の深化と国際貢献を推進する予定です。

定期協議会

本年2月には国際協力銀行との新しい連携の方策を探るため、山口大学で国際協力銀行と第1回の定期協議会を開催しました。この協議会では、山口大学が有する

人・知・技による新しい連携プログラムとして、初等中等教育分野での人材育成支援プログラムや海外高等教育機関等との連携プログラムを提案しました。

人材育成プログラム

法人化2年目としての本年度は、国際協力銀行と一層連携を深め、委託調査や地域と連携した新しい国際協力プログラムとして、人材育成プログラム（問題解決型統合研修プログラム）などを開発し提案したいと思っています。



協定締結後の記者会見



第1回定期協議会開催

連絡先
TEL:083-933-5026
E-mail:okazakif@yamaguchi-u.ac.jp



山口大学と 宇部工業高等専門学校との間で 教育研究交流協定が結ばれる

工学部教授 三浦 房紀

山口大学と宇部工業高等専門学校（以下、宇部高専）との間で、去る3月1日、加藤紘学長、幡中憲治校長をはじめとする両校関係者出席のもとに、教育研究交流協定が本学で結ばれました。

工学部と宇部高専は幅約5mの細い道路一本挟んで隣接しているという地理的条件もあり、これまでも工学部と宇部高専の間には共同研究、産学連携、知的財産に関する活動、留学生の交流など様々な交流が行われてきました。今回の協定は、新たに学生の単位互換も含めて、さらに一層この交流を大学として促進しようと締結されたものです。

本協定のもとで実施される具体的なプログラムとしては、平成17年度からは以下の工学部、宇部高専双方の開設科目の相互提供と単位認定による多様な学習機会の提供があります。

● 工学部から宇部高専への提供科目

（認定する単位の上限：4単位）

- ・工学部専門科目……………5学科の開講講義のうち、計102科目を提供
- ・共通教育科目……………1科目を提供

● 宇部高専から工学部への提供科目

（認定する単位の上限：4・5年生＝4単位、専攻科学生＝8単位）

- ・専攻科一般科目……………2科目を提供
- ・専攻科専門基礎科目…7科目を提供
- ・専攻科専門科目……………15科目を提供

高専の生徒にとっては、大学の幅広く深い内容の講義を受講でき、高専とはまた違った知的刺激を受けることができます。これが編入学への動機付けにもつながることが期待できます。一方の工学部学生にとっても大学で開講されていない講義を受講できるとともに、1年次に取得できなかった共通教育科目を山口まで受講に行かなくても高専の科目で一部代替できるというメリットがあります。

今後検討が進められるプログラムとしては以下のようなものが考えられています。

● 両校の各種施設の相互利活用

● 共同研究等、研究面での連携の強化

● クラブ活動を含めた学生の幅広い交流機会の提供

● 双方の特性を活かした地域貢献などの共同開催

今回の協定締結によって、宇部高専との交流が工学部から大学全体の交流へと広がり、地元企業との共同研究もこれまで以上に進み、知的財産権の取得や地域経済の浮揚にもつながるのではないかと、地域からも熱い期待が寄せられています。

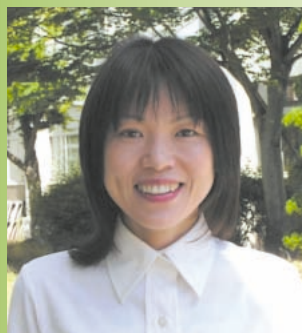
連絡先

TEL:0836-85-9536

E-mail:miura@yamaguchi-u.ac.jp



協定書の調印式の様子



高大連携とは何か？ —山口大学のかたちを求めて—

エクステンションセンター講師 辰己 佳寿子

高大連携とは

高大連携？？、一般的にはあまり知られていない言葉だと思います。高大連携は「高校と大学が、それぞれの教育資源を活用しつつ、連携・協力して行う教育活動の総体」とであると定義されています（『高大連携とは何か』勝野頼彦、学事出版、2004）。このように定義が大まかになってしまうのは、実際には、高大連携の形態がきわめて多様であり、個々の取組の趣旨や位置付けが曖昧なまま、多種多様な取組が行われているからです。

高大連携には、狭義と広義のものに分類されます。狭義の高大連携とは、「高校生を対象として、大学の教育資源を活用して行う高校の教育活動」であり、オープンキャンパス、入試説明会、研究室への訪問、出前講義、体験入学、講演会等があげられ、広義の高大連携とは「高校と大学の連携による、高校教育及び大学教育の改善・充実に資する取組」です。多くの高校や大学で実施されているのは前者の方です。

山口大学における高大連携

山口大学でも主に狭義の高大連

携を実施しています。それらはさらに大きく二つに分類され、担当部署が異なっています。オープンキャンパスや入試説明会等の入試広報に関連することはアドミッションセンターが担当し、出前講義・体験入学等はエクステンションセンターが担当しています。アドミッションセンターの活動は別の機会に譲るとしまして、ここではエクステンションセンターの実施している高大連携に焦点を絞ってご説明します。

出前講義や体験入学は、大学教員の専門的な講義内容を通じて、高校生の学習意欲の向上と人生の方向性を決めるきっかけづくりの一つであり、若者達の夢へ語りかけるものです。出前講義等は、たくさんの高校生に山大に来ていただきたいという入試広報的要素を含みつつも、短期的な目的だけでなく、地域における山口大学の社会的な役割をアピールしていく中

長期的な目的に重点が置かれています。

先述しましたように、高大連携は様々な取組が行われており定義も曖昧なので、試行錯誤的に取り組みながら独自のスタイルを作り、その意義を見出していく必要があります。これらに関わる高校教員及び大学教員は、高大連携の専門家ではありませんので、このような取組を通じて、互いに成長し、信頼関係を深めていくことが重要であり、それらの過程を経てはじめて有意義な高大連携というものになり立つのではないのでしょうか。

高大連携は、全国各地で実施されており、先進的な事例もあります。しかし、地域的・地理的な条件や編成学部等によって適切な形態は異なってきますので、山口大学独自の高大連携のかたちを構築しなければならないでしょう。



宇部高校との高大連携特別講義（於工学部）

ゴムのイントロピーなのだ!!!





出前講義・体験入学、高大連携特別講義

山口大学では「大学の先生がどのような講義をしているかわからない」という要望に応え、平成16年度に、出前講義リストを全学的にまとめた出前講義メニュー冊子を発行し、申し込みシステムを確立しました。講義件数は180件でした。平成17年度は266人の先生方に登録していただいておりますが、ここにも、先生方のそれぞれのオリジナリティを生かした出前講義のかたちがあります。そして、何らかのメッセージが高校生に届いていることと信じていま

す。しかしながら「1回きりの講義で、受講者がどれだけのことを理解できたのだろうか」という疑問もでてこないわけではありませぬ。ですから、出前講義と同時に、スーパーサイエンスハイスクールに指定された高校や高大連携協定を締結した高校との間では、出前講義や体験入学を発展させた連続講座を開講して、ひとつのテーマを掘り下げていく取組も進めています。一人でも多くの若者達に対して夢をかなえるためのベターな道を示唆できればと願っています。

大学には、研究、教育、社会貢献の使命があり、高大連携は社会

貢献のひとつです。これら三つのバランスを保ち、よりよい高大連携の実現のために試行錯誤を重ねています。ご協力いただきますようよろしくお願い申し上げます。

最後に、出前講義を受けた岩国市の高校2年生の感想を紹介したいと思います。

出前講義を受けてみて、現実の厳しさがとてもこたえました。それでも、自分の夢との距離がわかったため、さらにこれから目標を持って進んでいこうという意欲が高まりました。



下松高校出前講義（経済学部 柳澤旭先生）



岩国高校出前講義（工学部 堤宏守先生）



世界初の原生生物の水族館 「ミクロ生物館」の設置と維持 —山口大学と地方自治体との 画期的連携事業—

理学部教授 藤島 政博

経緯

平成17年7月16日に山口県由宇町に世界初の原生生物の水族館「ミクロ生物館」が開館します。これは、4－5年前に、本学運営諮問会議で地域貢献活動のあり方を協議した時に生まれた企画で、私と由宇町在住の当時の運営諮問会議の中島篤巳氏とでプランを作成し、由宇町の賛同と平成15年度の本学の教育研究重点化経費（社会貢献・交流促進重点化経費）の支援を得て実現したものです。JR由宇駅から柳井方向の海岸沿い数百メートルのところに、国土交通省等が建設する「由宇みなとオアシス」が建設中です。その1/3の面積（145㎡）を「ミクロ生物館」として使用させていただき、展示室と実験室を設置します。展示室には、高画質ディスプレイを複数台置き、顕微鏡の生画像と編集済画像を写します。実験室には、一般的な細胞生物学的実験が可能な設備を備えます。

現在、全国公募して選考された専門職員2名が4月中旬から勤務して、由宇町役場の「ミクロ生物館」準備室で開館のための作業をしています。専門職員の給与、備品費、光熱水費、消耗品費等は由宇町が負担し、原生生物の収集、

維持、展示等に必要なノウハウを私と日本原生動物学会が支援いたします。昨年11月には基礎工事の着工を記念して日本原生動物学会全国大会を山口大学で実施いたしました。今後、メディアやホームページ等を通じて国内外に「ミクロ生物館」の活動を周知させる予定です。

「ミクロ生物館」の目的

原生生物は、単細胞の動植物の総称で、ゾウリムシ、アメーバ、トリパノソーマ、トリコモナス、ミドリムシ、クラミドモナス、クロレラ等がこれに属します。原生生物は、我々の回りのいたるところに生息していて、これまでに6万5千種以上が知られていますが、1ミリ以下の細胞のために展示が難しく、動物園、水族館、植物園で一般の方々の目に触れることはほとんどありませんでした。「ミクロ生物館」に来館されますと、初めて目にする多様な原生生物の形態や行動に感動することと思います。生きた200種以上の原生生物のリアルタイムの顕微鏡像と高画質の編集済映像を常時お見せします。原生生物には赤潮の原因や病原性を持つ種類もありますが、食物連鎖の底辺を支え、水の

浄化等の機能も果たしているものが多く含まれます。また、ゾウリムシ等の繊毛虫類を使った研究では、「細胞は老化する」、「細胞は電氣的に興奮する」、「細胞に性がある」、「リボザイム」、「逸脱コドン」、「テロメアとテロメラーゼ」の発見等の生物学史上重要な発見が行われてきました。

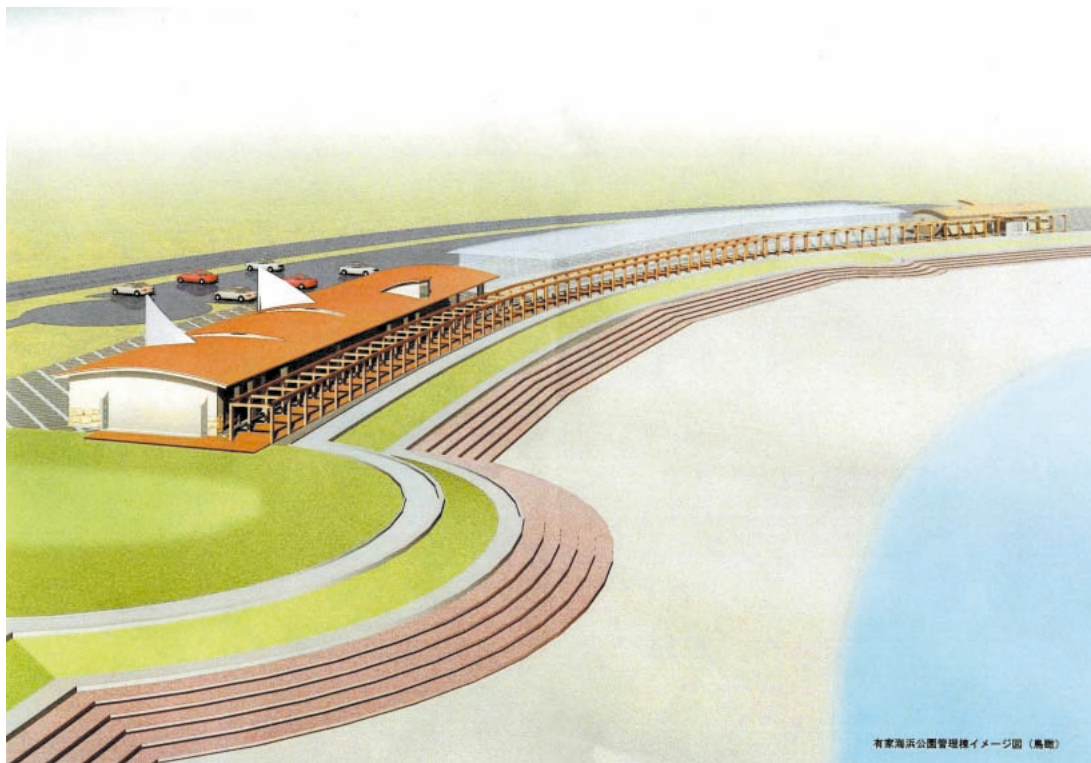
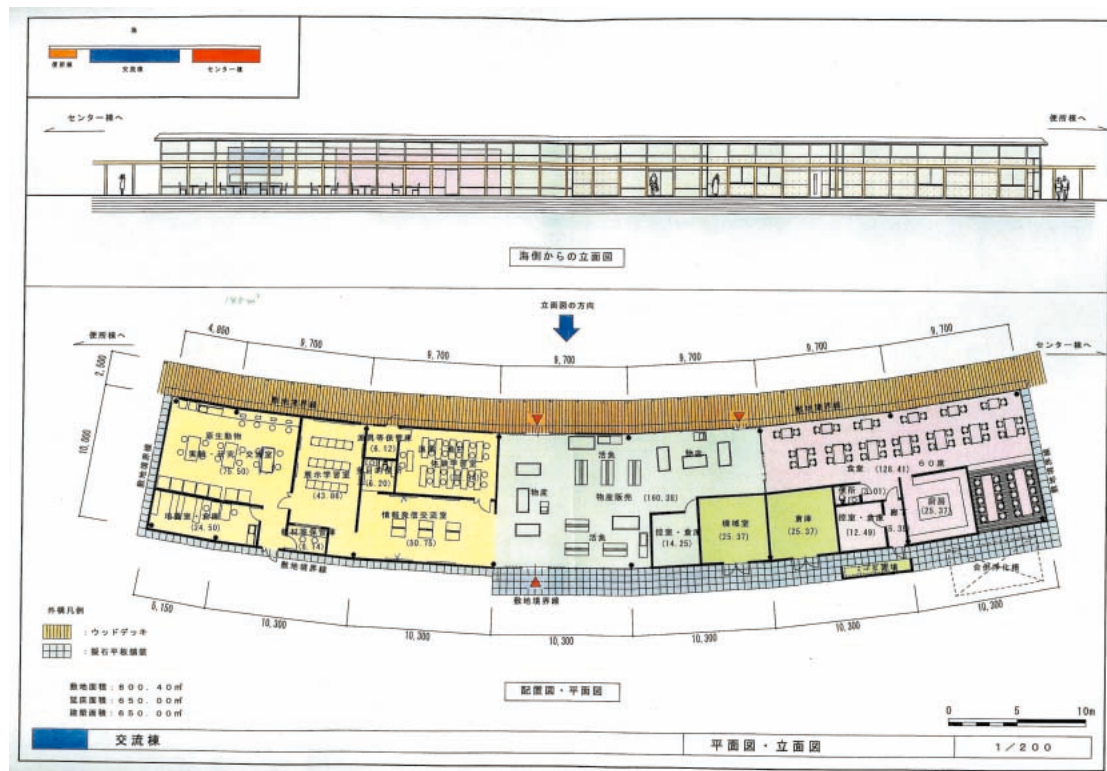
この施設は、「種の保存と教育研究機関への分与」、「地域学校園の生物実験の補助」、「現役の理科教員のリカレント」、「各種の原生生物に関する研究集会の実施」、「地元の方々に原生生物を通じた交流の場と生涯学習の場の提供」、「大学院生のインターンシップの場の提供」、「国内外の研究者に共同研究の場を提供」、「博士研究員や定年退官した元大学教員の研究継続の場の提供」等の機能を果たすことを目的としています。これが、山口大学発の国立大学法人と地方自治体との連携のモデルとなり、類似の試みが全国に広がることを夢見て、この施設の活動を支援して行きたいと思っております。

私は25年前に山口大学に赴任した時に、松下村塾を見て鳥肌が立つ感動を覚えました。「ミクロ生物館」に多くの原生生物の研究者



が集まり、松下村塾のように、こ
こから次世代のリーダーが輩出さ

れることを期待しております。



連絡先

TEL:083-933-5712

E-mail:fujishim@yamaguchi-u.ac.jp



平成16年度の 知的財産成果について

知的財産本部

1. 出願構造

平成16年度における山口大学の総出願件数は101件でした。どの学部からどのくらい出願されているかは、図1に見られるように、工学部が断トツに多く、次に医学部、理学部の順になっています。

さらに工学部については、学科別に表してみました（図2）。これを見ますと、機能材料工学科からが最も多く、以下、電気電子工学科、機械工学科・・・となっており、出願の多い学科は知的財産セミナー等の参加率も高く、発明創出意識も自然と高くなっているようです。

次に、出願の形態を見てみますと、総出願件数101件のうち、大学単独出願件数が80件、1企業との共同出願件数が19件、他大学、企業の複数人との共同出願件数が

2件となっています。共同出願が20%を超えており、今後はこの数が増えていくものと思われます。

また、出願1件における発明者数については、総出願件数101件のうち、発明者が1人（単独）の場合が30%、2人の場合が23%、3人の場合が17%、4人の場合が13%、5人の場合が17%、それ以上の場合が1%となっています。発明者が複数のものは70%にも達しており、これらの中で発明の貢献度に差があるとするもの、つまり持ち分が均等でないものは、76%に上っています。また、企業等との共同出願の場合、大概是fifty-fiftyとなりますが、持分に差があったものが7件ありました。

この持ち分は将来ロイヤリティ収益があった時の分配割合になりますので、出願時点は結構おおらかに考えていた人も、いざ収益が

出始めるとシビアな議論になることがしばしばです。そのために、発明の貢献度を確認する有力な証拠となるものが、後で紹介する山口大学で開発した研究ノートですので大いに活用して下さい。

なお、学生が貢献した発明は30%にも達しており、若い人の創造力を今後も大いに活かして頂きたいところです。

2. 出願トピックス

平成16年度に出願された特許の中に、工学部機械工学科（医学研究科応用医工学系専攻）の森浩二講師の「関節内超音波内視鏡支援装置」があります。これは、関節腔内において超音波診断（関節軟骨の形状、硬さ、厚さ、軟骨の粗さ等の測定）を行う装置で、実際に診断する際は、内視鏡視下で行

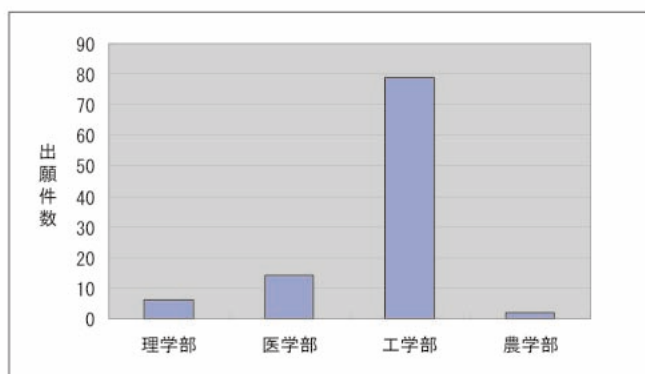


図1.平成16年度 学部別の出願状況
(全学の総計:101件)

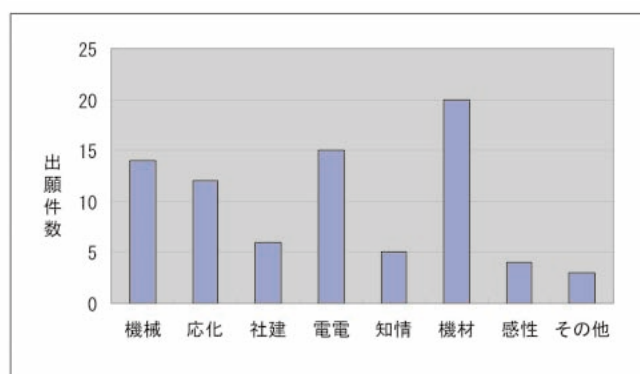


図2.平成16年度 工学部学科別の出願状況
(工学部の総計:79件)



うため、その操作は非常に困難でした。

本発明は、超音波内視鏡を多関節ロボットに把持させ、コンピュータの指令で超音波が関節軟骨に対して常に垂直になるように制御するようにしたものです。それにより、診断を自動的にしかも連続的に精度よく行えるようにして、これまでの困難さを解消することができたのです。

医工連携で医療に役立つ技術が次々と生み出されています。この装置の普及も大いに期待されることです。

3. 売れた特許

平成16年度に出願して早々と売れた特許があります。「防災事業計画支援システム」の発明です。

これは、工学部社会建設工学科の古川浩平教授の研究室が、他大学、企業と連携しながら共同開発したものです。従来、災害の危険箇所に関して、その災害発生危険度を設定することは、技術者の主観による部分が多くを占めており、精度・客観性の面から問題視されていました。

本発明は、数学的解析手法を応用することにより、災害発生の潜在的危険度を客観的に求めることができ、必要な場所に適切な防災対策をとることができる画期的な発明です。共同研究先と早くも特許実施契約が締結できて、ロイヤリティが入り、大きな成果を上げています。

また、平成16年度には、「研究ノート」について意匠登録出願を2件行っています。これは、山口大学知的財産本部、地域共同研究

開発センター、ベンチャービジネスラボラトリーの研究者が、大手事務機器メーカーと共同開発して出願したものです。

この研究ノート（図3）は、ページ毎に研究月日等を記入し、研究の進捗状況を上司等第三者が認証するサイン欄を設けています。しかもページの中抜きや改ざん防止のための特殊な連鎖手段が用いられる等の種々の工夫がされており、発明者の権利を守る有効な証拠資料になるでしょう。

この研究ノートは4月から全国の大学生協や文具店で販売されており、今後、広く普及することが期待されます。

発明を創出して頂いた皆様、それをサポートして頂いた皆様方に、この紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

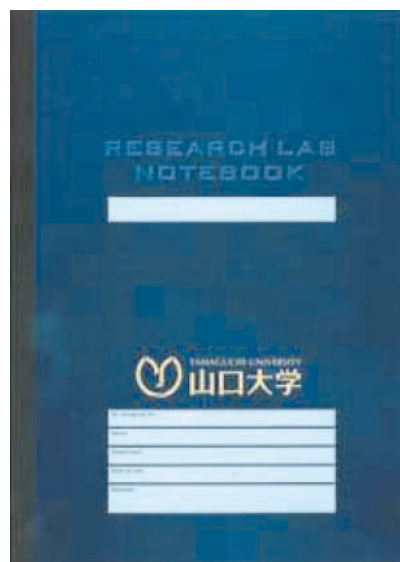


図3.山口大学と事務機器メーカーとで共同開発した研究ノート

連絡先
TEL:0836-85-9968
E-mail:chizai@yamaguchi-u.ac.jp

T O P I C S

「夏休みジュニア科学教室」が文部科学大臣表彰 科学技術賞 理解増進部門賞を受賞 ～地域の産学官が連携したジュニア科学教室による理解増進～

■ 三浦 房紀 工学部 教授

「夏休みジュニア科学教室」（実行委員長：筆者）は子ども達の科学技術に対する興味を喚起することを目的に、毎年夏休みに、小学生高学年から中学生を対象に、ものづくりや科学の楽しさを体験してもらうために、平成元年から県内10数会場で実施している教室です。このたびこの「夏休みジュニア科学教室」が「科学技術分野の文部科学大臣表彰・科学技術賞 理解増進部門」を受賞しました。

ことのおこりは、昭和から平成に移るころ、日本はバブル景気で、ものづくりの大切さがややもすると軽んじられ、理科離れが進んでいました。その様子に危惧を抱いた当時宇部時報社（現宇部日報社）社長の故白石真三氏、今回一緒に受賞の村田武彦氏（宇部日報社総務局長）、見山友裕氏（山口東京理科大助教授）達が宇部市近郊の大学や企業に、子供たちに科学や技術の面白さを体験学習できる教室を開こう、と呼びかけたことから始まりました。

当初は宇部市周辺を中心にした大学や企業のボランティア活動的な意味合いの強かった科学教室ですが、その後、県や関係する市町教育委員会の後援、(社)常盤工業会の支援を受けて、次第に県内各地での教室開講へと広がり、規模も大きくなってきました。

昨年は山口大学（工学部・医学部・理学部・農学部・エクステンションセンター）、山口東京理科大学、宇部フロンティア大学、宇部フロンティア大学短期大学部、宇部工業高等専門学校、徳山工業高等専門学校の学、宇部興産、協和発酵工業宇部工場、中国電力（宇部営業所・宇部電力所・新小野田発電所）、セントラル硝子宇部工場、宇

部日報社、テレビ山口の産、および財団法人やまぐち産業振興財団、(社)常盤工業会の公の、合計14機関の協力を得て、計15会場17テーマの講義がありました。参加申込者は879人のところ、定員の関係で587人の参加がありました。



一緒に受賞した見山助教授とともに(宇部日報社にて)



平成17年度科学技術分野の文部科学大臣表彰 表彰式
(虎ノ門パストラルにて)

T O P I C S

子供たちは目を輝かせて、熱心に先生の話聞き、実験に取り組んでいます。写真はその一コマです。企業で教室が開催されるときには、工場で製品が作られる過程も見学し、感心したり、驚いたりしています。教室には、お父さんやお母さんも一緒に参加し、子供たちと一緒に科学する楽しさを味わっている姿がたくさん見られます。今年度はさらに参加企業が増え、会場も増える予定です。

授賞式は4月17日、東京の虎ノ門パストラルでありました。表彰式、大臣挨拶、受賞者代表謝辞の後、記念撮影をして式典はすべて終了しました。

これまで講師を務めてくださった先生や企業の方たちの総数は300人を超えています。たまたま実行委員長、事務局をしていた3人の名前で受賞しましたが、関係者一同が受賞したもので、皆さんと一緒に喜びたいと思っています。

連絡先

TEL&FAX: 0836-85-9536

E-mail:miura@yamaguchi-u.ac.jp



TOPICS

学生諸君のための「経済学部百年」の手引き

■ 藤井 大司郎 経済学部 教授

経済学部の新しい歌碑

経済学部の玄関前に、5月28日、経済学部卒業生の同窓会である鳳陽会の手によって、歌碑が建てられます。刻まれる歌は、「花なき山の…」ではじまる鳳陽寮歌。かつて亀山の麓にあった経済学部校舎（現在の県立美術館の位置）と道を隔てて位置していた鳳陽寮（現在の県教育会館の位置）を毎日往復していた卒業生にとっては、死ぬまで忘れることのない歌のひとつです。四番まである歌詞の碑文は、鳳陽会現理事長で山口大学の特別顧問でもある松野浩二氏（大学第一期卒）が筆をとったものです。

松野浩二氏をはじめとする第一期生が入学した昭和24年（1949年）から数えて、今年は山口大学開学・学部創立56年目になりますが、経済学部の歴史は、これをさかのぼっていけば、その直接の前身である昭和19年（1944年）の山口経済専門学校からは61年、そして、その元の名称である山口高等商業学校、いわゆる「山口高商」の創立（明治38年、1905年）からは、今年が丁度100年、記念すべき年となります。これを祝って、6月17日と18日には、全国から卒業生が集い、地元の皆さんにも共に喜んでいただくための記念行事を開催することとなっています。

実学志向のルーツ

今から100年前、山口高商が開校した明治38年（1905年）はどんな時代だったのでしょうか。

日本国内では、前年に始まった日露戦争で日本海海戦勝利の報に国中が沸きかえり、わが国がアジアの列強としての地位を固めた時期でした。また、世界史を見ると、この年、自動車普及のきっかけとなったT型フォードが売り出され、前年にパナマ

運河の工事開始、2年前にはライト兄弟の初飛行、と交通の時代である20世紀の始まりを象徴する出来事が起こっています。第一次世界大戦も社会主義国家の誕生も、なお10年ほど後のことです。考えてみれば、この100年は、現代の交通機関が生まれ育ち、エネルギー革命が起こって、経済社会の国際化と世界戦争の時代、20世紀社会の壮大な実験と言われた社会主義国家の盛衰をも飲み込んでいます。

100年前のこのような社会的背景にあって、国内では実業教育振興の機運が高まり、山口高商は、東京高商（現一橋大学）、神戸高商（現神戸大学）に次いで、長崎高商とともに全国三番目の高等商業学校として設立されました。この全国三番目の名門高商という意識が学生・教員は勿論、山口の住民にも長く引き継がれてきました。このごろでは、さすがにこうした意識も希薄となっていますが、それでも、最近まで「どちらが真の三番目か」をめぐる、長崎大学経済学部と「仲良く争って」きたほどです。

高商時代からの実学志向の「血筋」が、経済学部には今なお脈打っていると思われます。昨年度から発足した「職業会計人コース」は、高商以来の簿記・会計教育の重視を現在によみがえらせた画期的な取り組みで、全国的に注目されています。また、今年度発足した国立大学初の新学科「観光政策学科」、工学部との連携ではやはり全国初のMOT（技術経営）大学院創設も、目に見える社会貢献を目指した高商以来の経済学部の伝統に根ざしていると言えるでしょう。

東アジアの教育研究

高商設立の背景には、実業教育の振興と並んで、当時のわが国が世界に列していくための国策目的

TOPICS

がありました。山口高商の場合、東アジア地域の調査研究を使命として国から託されていました。戦後、経済学部として再出発するに当たっては、戦前のいとなみに対する反省に立ち、わが国も東アジアの一国であるという自覚のもとに、アジアが求める課題解決に取り組む決意を明らかにしてきました。

山口高商からの100年の歴史には、このように光と影の部分がありました。戦後、卒業生の熱意と奔走で設けられた東亜経済研究所が膨大で貴重な東アジアに関する文献の一大センターとして注目されるようになり、全国的にもめずらしい経済資料の博物館である「商品資料館」が建設され、また、人文学部との協力による独立大学院東アジア研究科が設置されて、現在、山口大学が東アジア教育研究のメッカとして存立しているのは、100年の伝統の光の部分ばかりでなく、影の部分をもしっかり見据えてきたからだと言えるでしょう。

経済学部の前庭には別の歌碑が建っており、ここには「春を弔う落英か...」で始まる「山都逍遙歌」が刻まれています。学徒動員で没した経専時代の学生、橋川敏男氏が作詞・作曲したもので、不幸な戦争の時代の真っ只中で学んでいた学生たちが何を感じ、何を願っていたかが、その哀しい調べにのって伝わってくるようです。当時の卒業生には、自分の生きた時代の記憶とともに、やはり忘れることのできない歌となっています。

日本のハイデルベルグと建学の祖

山口高商創立以来、社会に送り出してきた卒業生の数は、今や2万2千人を超えるまでになっていますが、地方に位置する大学にありながら、全国の有名大学に負けない有為な人材を輩出する学部として精彩を放ってきました。新しい歌碑に刻まれた「花なき山の...」の詞からは、「絢爛華麗の装いを欠くも、雄勁なる気魄をたたえ、簡素質実の匂い馥郁とし...」と評された鳳陽寮生の姿が浮かび上がってきます。彼らは、青春の地山口を、しばしば古い歴史を誇る大学の街ハイデルベルグになぞらえていました。そんな先輩たちの気風や気概を今の学部生の諸君にももってほしいと考えるのは、アナクロニズムでしょうか。

この鳳陽寮歌がつくられたのは、実は、山口高商のそのまた前身にあたる旧山口高等学校時代の明治32年（1899年）にさかのぼります。では、経済学部、山口経専、山口高商、旧山口高校...とさらに学校の歴史をさかのぼってみますと、最後にたどりつくのが、現在の山口市中河原にあった「山口講堂」（文化12年、1815年創立）です。この山口講堂を設立したのが「鳳陽先生」、つまり上田纘明(つぐあき)であり、鳳陽というのは、その号です。

上田鳳陽は長州藩に生まれ、萩明倫館に学んだのち、藩主への講義を行ったほどの高名な教育者、



TOPICS

研究者となった人です。長州藩の一大郷土調査研究誌「風土注進案」の編纂という業績も残しています。上田鳳陽の人となりやうかがわせる逸話が多く伝えられていますが、ある時、共に学んでいた友人の山県太華（後に明倫館学頭を務める藩の大儒学者）に向かって「大丈夫（有為な男子）まさに天下を經理するを以て志とすべし」であり、いつまでもこまかいことにこだわり、うわべばかりをつくろうような勉強はいい加減にやめておけ、と一喝したと言います。吉田松陰を生み、回天の偉業を成し遂げ、海外に「長州五傑」を送った長州藩の歴史と重ね合わせると、スケールの大きい実学教育志向は、私たちの建学の祖の時代以来の精神だったと言えるかも知れません。

経済学部の前庭にはさらにもう一つ歌碑があり、土井晩翠作詞・山田耕筈作曲の「山口高等商業学校」の歌詞が刻まれています。この歌詞の中には、山口高商の標語であった「士魂商才」があります。この標語を胸に巣立って行った卒業生の心栄えは、鳳陽先生から受け継いだものにほかならないでしょう。

温故知新

人は、今ある自分の境遇が何に由来しているかを知ることによって、自分のこれからの歩む道に光をあてることが出来る、と言います。それならば、在学生の諸君に今居るこの経済学部のことをよく知ってもらうことも、大事で有益な教育の一環になる

と思われます。

この拙文を読まれた学生諸君には、自分の人生につながる歴史の糸の一本として経済学部のことをもっと生々しく知ってみたい、という気になって頂ければ何よりです。そんな人のために、格好の新著をご紹介しますおきましょう。



松野浩二著「奮発震動の象あり」---防長教育史の人びと、鳳陽会発行、平成17年3月。
(学内でも廉価で販売しています。)

山口高商と校歌作曲者の山田耕筈とを結びつける意外な“トリビア”など、興味深いエピソードをまじえながら、高商、経済学部ゆかりのある人々がいかに多く歴史に関わり社会を変えて行ったかを、見慣れた山口の風物詩を背景に、私たちに物語ってくれます。

もうひとつ...。歌は、人の心に残る思い出の一コマコマを鮮やかに色づけている絵の具です。経済学部の前庭に建つ3つの歌碑に刻まれた歌を唱い継いでみることで、自分と奇しくも糸でつながった先輩たちの見たもの、感じたものを少しでも共有できるかも知れませんね。



TOPICS

サイエンスワールド2005 理学部と地域社会の連携で自然科学の祭典

■ 大城 紀代市 サイエンスワールド2005実行委員長 理学部 教授

会場風景

理学部主催のSW2005は早春の3月13日(日)ニューメディアプラザ山口で開催されました。小雪の舞う寒い一日でしたが、親子連れ、小中高生、一般の人々と700人を超える参加者があり、館内はごった返すほどの熱気に包まれ、各ブースの担当スタッフはうれしい悲鳴をあげながら参加者とともに展示・実演に奮闘していました。展示のほかに、三つの講演もありました。高校生が最前列に座っていて、講演が終わるたびにいろいろ質問している光景が印象的でした。

参加者のなかには、リピーターもかなりいたでしょう。その人たちにとっては、年々内容が充実し規模が大きくなっていく様を見て、ますますこのイベントが好きになり、来年をまた楽しみにしたことでありましょう。落ち着いた山口の町でこのような自然科学の祭典が催され、会場では、職員や学生スタッフが大勢の市民とともに、科学する喜びを感じ、熱心に科学文化を語り合っている光景に、地域連携事業としてのこのイベントのもたらす効果の確かな手ごたえを感じました。

折りしもその日は、県立博物館で開かれていたピカソ展の最終日でした。もう30年以上も昔の話になりますが、山口大学が後河原にあったころ某旧帝大の学長が山口市を訪れ山口大学で講演をされた際、このすばらしい環境の中にある大学で学べる学生は幸せである、また、この美しいキャンパスの由緒ある大学で教育・研究のできる教員がうらやましいと語ったと伝え聞いたことがあります。そして山口市＝ゲッチンゲン市、山口大学＝ゲッチンゲン大学とたとえたそうです。ゲッチンゲン大学は20世紀初頭、数学や自然科学の世界の中心

でありました。数理哲学のヒルベルトや理論物理のボルンがいて、ニールス・ボーアやフォン・ノイマンも出入りしていた大学です。サイエンスワールドを主催するにあたって伝え聞いたこの話が懐かしく思い出されました。以下にこのイベントの背景、目的、内容、クイズラリー、アンケート調査集計などについて報告します。



背景と経緯

宇部地区では工学部と工学部同窓会（常盤工業会）

TOPICS

が主催する夏休みジュニア科学教室があります。それに類するイベントとして、理学部では「先端科学フェスティバル」が平成11年3月に開催されました。これは若手教官有志により企画されました。翌年からは、「理学部サイエンスワールド」と改称し、毎年開催されております。このイベントは、高校生向きの出前カレッジ、1日体験入学などとともに理学部の公開総合事業である「サイエンス・ミニカレッジ」の中の一つの企画として、理学部後援会、理学部同窓会（鴻理会）、学会支部、県や市の教育委員会、新聞社、テレビ局などからの後援を受けて実施されています。今年は、マツダ財団からの補助もありました。

イベントの目的は、地域社会や県内外の高等学校との連携で、小中高生から、一般市民を対象に、理学部で行われている先端的な研究を中心に、講演・展示・デモンストレーション実験を通して様々な科学や科学文化を紹介することにより、参加者が一体となって科学を楽しみ、科学を語り合うことで、科学に対する興味を身近に感じてもらうことです。もちろん子供たちの理科離れを阻止することも目的のひとつであります。

内容

館内には26のブースが設営され、29の展示・実演が行われました。各講座の研究室紹介のパネル展示もありました。SSH校の山口高校、岩国高校、益田高校、科学部活の熱心な厚狭高校、萩高校からの特別出展、そして常連の防府市青少年科学館ソラールからの特別出展がありました。今年は、教育学部と農学部からの特別出展も加わりました。29の展示・実演のテーマは次の通りです。どれも興味をそそられるタイトルです。

「六角形のふしぎ」、「ちえの輪とパズル」、「ふしぎな数と形の不思議」、「おもちゃと物理」、「クイズ・物理の常識非常識」、「光と色と音の不思議なサイエンス」、「世界の岩石を顕微鏡で観察しよう」、「山口の火山とその不思議」、「レーザー光線の不思議」、「高分子で遊ぶ」、「地図を4色で塗れますか」、「蝶と蛾の観察」、「ゾウリ

ムシの世界」、「身近な微生物」、「光が起こす分子の変化」、「不思議な水」、「蛍光染料を合成し、性質を調べる」、「染色体が増えると植物はどうなるの?」、「習字を測ってみよう」、「石見地方の自然探求：水晶・高津川・鳴り砂」、「メダカの生態」、「植物の不思議」、「科学マジックで遊ぼう」、「電気溶接機でクリップアート!」、「高校生の発明作品」、「直流リニアモーターカー、直流モーターの製作」、「サイエンスショー：金属のひみつ」、「ミニ天体写真展」、「工作教室：このこカメさん」

このような展示・実演の行われた館内の隣の講演会場では、理学部の3人の先生方の講演が行われ、多くの方々が熱心に聴講されました。講演のタイトル：「がんと不老不死—細胞生物学の立場から—」（室伏 擴先生）、「環境浄化のための光触媒材料の開発」（山崎鈴子先生）、「生きている地球：プレートテクトニクスとプリュームテクトニクス」（君波和雄先生）。



科学なんでも質問コーナー、クイズラリー、アンケート調査

「科学なんでも質問コーナー」では、科学に関するどのような質問でも受けることにし、その場で答えられない場合は、後で調べて連絡するようにしました。「クイズラリー」の問題は、展示と関係した15の問題を用意し全問正解者には賞品をプレゼントしました。アンケート調査は、小学生用、中学生用、高校生用、大学生・一般用に分

T O P I C S

けて行いました。アンケート調査の一つ「山口大学に何か期待するものがありますか」に対して、サイエンスワールドのように子供の知識欲を満たすようなイベント、学術全般にわたって一般の人が参加できるようなイベントをたくさん増やしてほしいといった回答がありました。

SW2006に向けて

S W2005は多くの関係者のおかげで無事終了しました。このイベントは理学部の地域貢献事業の一つとして十分な役割を果たしております。しかし、継続してより良い開催を維持していくには、それ相当の労力と経費がかかります。大学の国立大学法人化により、このイベントの経費面にも大きな影響がありました。たとえゼロ査定であっても、その重要性を深く認識され、理学部の少ない予算から経費を捻出され、S W2005の開催を英断された増山理学部長には頭が下がる思いがします。言うまでもなくこのイベントは、理学部を超えて山口大学のイベントとして地域に受け入れられ定着してきています。その意味では、このイベントが大学全体からの支援の下で安定的に開催されるのが自然であるし、そうなることを強く願っています。

学内連絡先

TEL&FAX083-933-5652

E-mail:oshiro@yamaguchi-u.ac.jp



TOPICS

国際シンポジウム 「東アジア伝統人形劇の継承と発展」

■ 阿部 泰記 教授 大学院東アジア研究科



上演に3カ国語の字幕をつけました

大学院東アジア研究科・人文学部の主催で、山口・中国・台湾・韓国から代表的な人形劇団を招致し、東アジアの伝統文化について考える国際シンポジウムが2004年11月13日（土）に開催されました。最初に現代人形劇センター顧問の宇野小四郎氏から伝統人形劇の歴史と現状についてお話いただきました。宇野氏は創作活動もなさっている人形劇の専門家です。

山口の人形浄瑠璃

山口では人形浄瑠璃が徳地・周南などの地域で伝承されています。今回上演を依頼したのは周南市の安田糸あやつり人形芝居保存会です。12名の会員がおられ、三丘小学校の生徒を教えています。ここの人形浄瑠璃は淡路から伝承したと言います。また昔は和霊大明神に奉納していたそうです。芸能と宗教の関係を知るうえでも興味深く感じました。保存会が大人の恋愛を描いた『艶姿女舞衣』『酒屋の段』を上演し、小学生が親子の情愛を描いた『傾城阿波の鳴門』『順礼歌の段』を上演しました。日本の情緒あふれる伝統文芸の価値を再認識できたと思います。

韓国のひょうたん人形劇

韓国からは瑞山市のひょうたん人形劇パクチョムジノリ保存会に来ていただきました。総勢12名のかたの上演はみものでした。もともと流浪芸人が創作した統治階級を諷刺するどぎつい棒人形劇でしたが、瑞山の農民はひょうたんに統治階級の顔をユーモラスに描き、農耕の疲れを癒やす愉快的な内容に変えました。農楽を伴奏としています。瑞山文化院ではこの人形劇のテキストを編纂し、ビデオやVCDに録画して伝承に努めています。韓国民俗研究所の朱剛玄所長が同行され、この人形劇の出現の背景について解説しました。



韓国端山パクチョムジノリ

TOPICS

台湾のゆび人形劇

台湾からは西田社布袋戲基金會にゆび人形劇を上演していただきました。台湾には固有の民話がたくさん伝承されています。今回はその中で『水鬼作城隍』を選んでいただきました。伝説では、川で水死した人が転生するために、身代わりとなる犠牲者を川に引きずり込むといわれています。この作品の魅力は、犠牲者に同情して川に引きずり込むことができず、いつまでも転生できない水死者が、死後の世界で善悪を裁く「城隍」という神様になることです。子供の情操教育に最適であり、漁師が水死者の友人となり、水死者に犠牲者を救うよう忠言する場面も設けられています。ゆび人形の軽快な動きがあざやかでした。



台湾布袋戲

中国の木偶戲

中国からは貴陽市木偶劇団に、ノトチュンという若者が、村を荒らす豹の精を退治するという苗族の英雄伝説を披露していただきました。伝説は中国の絵本にも描かれています。苛酷な自然と闘う人間の営みを象徴的に描いた作品だと言えます。作中では子供の情操教育に役立てるために、豹に迎合するカラスを登場させたり、若者を援助する神仙を登場させたりして、善悪を対照的に描き出しています。長さ1mほどの棒人形がライトに燦然と輝いて躍動していました。



貴州木偶戲

伝統人形劇の役割

今回のシンポジウムでは東アジアの各地から、糸あやつり人形、ひょうたん人形、ゆび人形、棒人形とさまざまな形態の人形劇団が集まり、その形態に相応した動きによって夢幻の世界を現出してくれました。伝統人形劇は大人が楽しむばかりではなく、子供の情操教育にも役だっています。ただその価値を紹介しなければ継承者もなくなり絶滅するかも知れません。今回のシンポジウムがその伝承にいくらかでも貢献できたのであれば幸いですと考えております。参加していただきました講演者、各地の人形劇団および関係団体の皆様、支援をしていただきました山口市と山口大学教育研究後援財団には心から御礼申し上げます。なおこのシンポジウムの成果報告は「山口大学文学会誌」55巻（2005.3）に発表いたしました。また山口ケーブルテレビジョンで放映もしていただきました。



参加者記念写真

連絡先

TEL&FAX: 083-933-5260

E-mail: abey@yamaguchi-u.ac.jp

TOPICS

山口に時間旅行展がきた

■ 井上 慎一 教授 時間学研究所
■ 一川 誠 助教授 工学部・時間学研究所

時間のことを考えたことがありますか？

時間とは何か？考えたことがありますか？いつも遅刻しそうになるまで起きられない朝の時間、サッカーの試合で負けそうになって必死に攻めまくる残り5分の時間、解けない問題に冷や汗を流した試験の終了までの時間など、時間は身近な毎日の生活に関わり合ったことですが、同時にそれがなんだと言われて答えられる人はほとんどいない不思議なものです。その不思議さを体験できる展覧会が今、山口で行われています。

科学未来館

この科学展覧会は東京お台場にできた日本科学未来館（館長 毛利衛さん）の特別展示第1号として2年前に作られました。科学未来館は「科学を文化に」を合い言葉に宇宙開発から脳科学まで先端的な科学技術を一般に普及するために幅広く活動していますが、その最初の特別展示のテーマとして時間が選ばれました。目に見えない時間をどうして展示するのか？未来館の人たちは途方に暮れてしまいました。そこで、山口大学にあるという珍しい時間学研究所に相談が持ち込まれました。

時間学研究所

山口大学時間学研究所は前学長の廣中平祐先生の肝いりで大学内の理系、文系の先生を集めて作られた研究所です。時間は宇宙の問題であり、同時に哲学の問題でもあるので、経済や社会学の先生から宇宙論や生物学まで、遠く離れた分野の先生が一緒になって、わいわいがやがやとやるにはちょ

うどよいと廣中先生は考えられたようです。それに時間をテーマにした研究なんて、どこでもやっていませんから、大学の特徴になるのではないかと先生は考えていました、そんなところへ未来館から相談が持ちかけられました。よし、これは時間学研究所の総力を挙げて取り組むべき機会が与えられたと私たちは喜びました。

山口から多くの先生が日帰りで東京お台場に何度も通いました。準備は1年に及びました。それでも他のこの種の展示に比べたら、短い準備期間でしかありませんでした。普通は2年から3年をかけるものだそうです。その結果、できあがったのが2003年3月から行われ、16万人が見た時間旅行展でした。



時間旅行展はお台場、上海、メキシコでも行われました。写真は上海の人たちを楽しませる時間旅行展エントランスと生命のリズム。 写真提供 内田まほろ

TOPICS

世界を巡る時間旅行展

時間旅行展ははじめから世界の人に見てもらえるように、巡回するつもりで作られています。時間は世界の誰にも平等に配分され、誰もが言葉や文化を超えてわかり合えるテーマだからです。東京の展示を終えてから、時間旅行展は世界を旅してきました。今まで上海に2ヶ月、メキシコで3ヶ月滞在しました。それが今度、時間学研究所のお膝元、山口にやってきました。山口情報芸術センター(YCAM)で6月19日まで、無料で公開されています。

科学とアートの融合

それでは、少し、時間旅行展をご案内しましょう。会場に入ると、いくつかの不思議な数字が並んでいるエントランスです。宇宙の長い時間と生命の危うい時間のただ一瞬の交点に立って、影が揺れている自分を見つけられるでしょう。そのとき、

時間のことを考えてみましょうというこの展覧会のメッセージが感じられます。次に進むと右に3万年に1秒しか狂わないセシウム時計が飾られ、左に人の脳にあるという生物時計が置かれています。続いて象とネズミの鼓動の速さが違うことを実感できる動物時間、それに星からやってくる光の時間を摸して、鮮やかな光の玉が押し寄せてくる光の旅が見られます。美しいアートとして楽しめばそれでよいのですが、後からその説明を読むと、時間の多様さを考えさせられるように作られています。2階に上がるとまだまだ多くの展示があります。でも、残念ながら紙面が尽きたので、あとは是非、情報芸術センターに足を運んで、自分で楽しんでください。



山口時間旅行展開催を記念して、時間学研究所の生みの親、廣中平祐先生と日本科学未来館館長、宇宙飛行士の毛利衛さんの対談が行われました。

(左：毛利衛日本科学未来館館長、右：廣中平祐山口大学前学長) 写真提供 YCAM

山口大学Webページに関するアンケート結果報告

広報戦略委員会

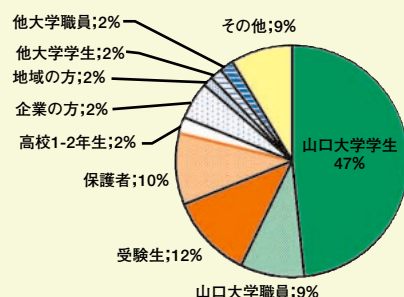
広報戦略委員会では山口大学Webページをリニューアルするにあたり、1月31日～3月23日の間で「山口大学Webページに関するアンケート」を実施しました。その結果総数255件の回答が寄せられ、それらを参考にして、ユーザビリティ・アクセシビリティを考慮したWebページへの改善に努めました。アンケートに御協力いただいた方には、この場をお借りして御礼申し上げます。

アンケートの項目は主に以下の内容について聞きました。

- ①利用者区分
- ②利用頻度
- ③訪問目的（複数回答可）
- ④情報の探しやすさ
- ⑤充実・追加して欲しい内容（複数回答可）
- ⑥デザインについて

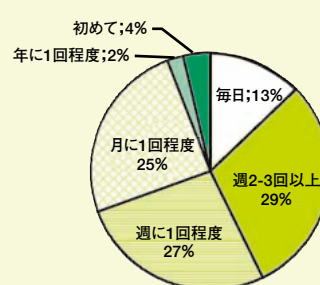
アンケート結果

■ 利用者区分 ■



回答（総数255件）の内訳は学内者から146件、学外者から109件で、全体の約半数が「山口大学の学生」からでした。

■ 利用頻度 ■

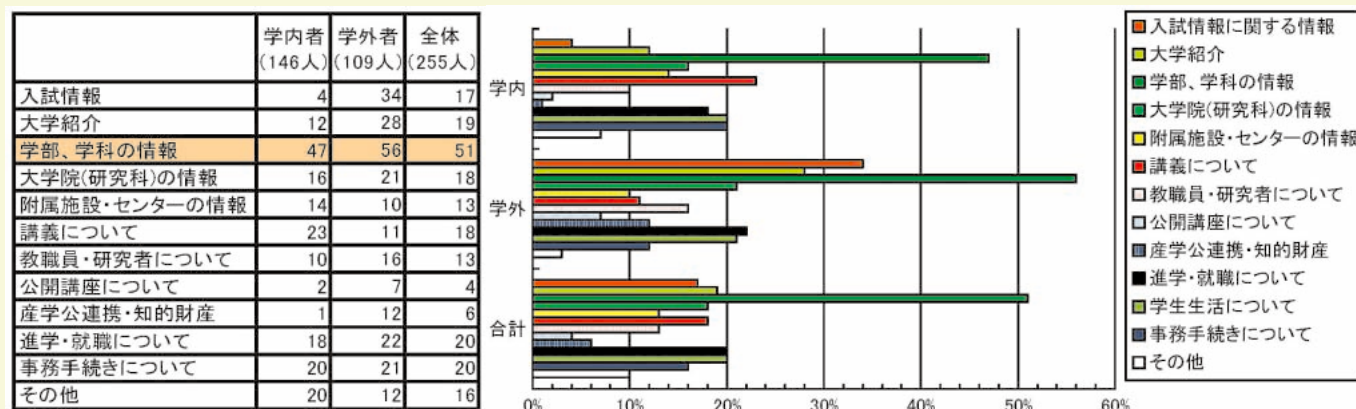


■ 目的 ■

訪問の目的は、学内者・学外者共に、「学部・学科情報」が多く、「学生生活について」、「進学・就職について」と続きます。また、学外者では「入試情報」や「大学案内」等大学の情報を入手する事が、学内者では「講義について」や「事務手続き」等普段の学習・業務に付随した利用が目的として考えられます。

また、Webページから「入試情報」を入手しようとしている受験生は回答者30人中23人（約77%）に上りました。「大学院紹介」は50%、「学部・学科情報」も67%の受験生が訪問目的として挙げており、入試広報において「Webページ」が重要な役割を果たしていると考えられます。

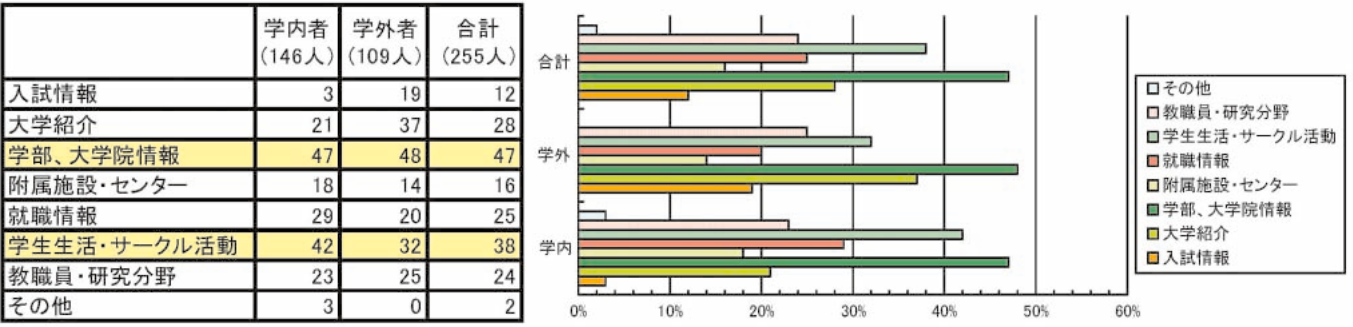
山口大学Webページを訪問した目的（単位：%）



■ 充実して欲しい内容 ■

充実して欲しい内容として「学部・大学院情報」に意見が多く寄せられており（訪問者255人中120人：47%）、半数近くの人から要望がありました。多くの訪問者が学部・大学院情報を求めてアクセスしているにもかかわらず得られる情報は十分な内容とはいえないようです。また、「学生生活・サークル活動」には38%（255人中98人）の人が内容を充実して欲しいと望んでおり、特に大学構成員である「山口大学の学生」で半数近く（123人中59人）の人が学生生活・活動に関する内容を充実して欲しいと思っている結果になりました。

さらに充実して欲しい内容 （単位：%）



この他、具体的な要望を把握できるよう問題点や要望を自由記述で回答していただき、主に次のような意見・要望が寄せられました。

- ① トップページが表示が遅い（重い）
- ② プルダウンメニューが使いにくい（正しく表示できない）
- ③ リンクが複雑で分かりにくい。目的の情報にたどり着くまで時間がかかる。
- ④ 旧スペック機やMacに対応して欲しい

- ⑤ 学内限定のページが多い
- ⑥ 学部情報が乏しい（学部によってコンテンツの差が大きい）。大学院入試情報、編入学に関する情報の充実。
- ⑦ 更新回数を頻繁にして欲しい
- ⑧ 映像コンテンツの充実

①から④の問題点については今回のリニューアルで次のように改善いたしました。

■ トップページリニューアル ■

今回のトップページリニューアルでは、表示速度が遅くならないようにするためにプルダウンメニューを使用せず、「大学紹介」「学部・研究科」等関連する項目をまとめたサブページを作成し、情報を関連付けて表示するようにリンク構造を変更しました。また、アンケート結果からも、訪問者別に異なる目的で大学Webページを訪問していることが分かるように、「～の方へ」という訪問者別のメニューを作成し、訪問者別によく利用されると考えられる情報をひとつのページにまとめたサブページを作成しました。（その結果、「トップページから直接目的のページに行けない（2回クリックする必要がある）」という問題点が生じています。）

他にも、目的の情報を探しやすい「サイトマップ」や「検索システム」を新たに設置しました。

また、ユーザビリティにも配慮し、閲覧環境の違い（OS、ブラウザの種類、ディスプレイの種類、接続環境）によって閲覧不可能にならないよう努めました。

⑤は、学内限定にする必要があるのか見極め、認証システムをつける等の対応をしていきたいと思います。

⑥から⑧は今後の課題です。訪問者が必要とする情報・コンテンツにどのようなものがあるのか、またどのレベルまで要求されているのかを、広報戦略委員会で検討し、更なるWebページの充実を目指していきたいと思います。

今後

今回のリニューアルは、現段階では、情報発信のため「表示のひな型（テンプレート）」を作成した、下準備に過ぎません。今後、各学部・部局と連携してコンテンツの充実を目指すと共に、Webページの特性を生かした情報提供を目指していきたいと考えます。また、継続してWebページに関する意見、要望を募集しております。どんな意見でも構いませんのでお寄せ下さい。

私の授業

コンピュータ・グラフィックス



平林 晃 助教授
工学部 知能情報システム工学科

身近な最先端技術

私は工学部知能情報システム工学科の3年生に対してコンピュータ・グラフィックス（以下CGと略記）という講義を担当しています。最近ではあらゆるテレビ番組においてCGが用いられ、情報をわかりやすく伝えてくれます。また高校生の皆さんは、テレビゲームで極めて美しいCGをご覧になっていることと思います。このような身近な最先端技術であるCGがどのように実現されているのかを学ぶのが私の講義です。

数学とプログラミング言語

CGの基本は、実際に起きる現象をコンピュータの中で擬似的に実行し、それを画面に表示させるということです。例えば、机の上に写真が置いてあるとします。もし部屋が真っ暗であれば、その写真を見ることはできません。また明るい部屋の中でも、つやのある写真とない写真では見え方は異なります。こうした現象を数式によって表現し、プログラミング言語によってコンピュータに指示を与えることによって、画面にきれいなグラフィックスが表示されるのです。このため、CGを勉強するには数学とプログラミング言語の両方を勉強する必要があります。大学に入ってからCGを勉強し

てみたいという高校生の皆さんがいましたら、今勉強しているベクトルや行列の計算がそのまま活かされますから、しっかり勉強しておいて下さい！

講義の実際

毎週の授業は、数学的内容を解説する週と、その内容をプログラミングによって実習を行う週の隔週で進みます。実習では写真1にありますように、学生が各一台のコンピュータを使います。うまくいかないことも多々ありますが、私や先輩学生がアドバイスをして、難局を乗り越えていきます。

教科書には文献1を用いています。この教科書で用いられているC++という言語は大規模なシステムの構築に適したもので、実際に企業でも用いられているものです。就職してからこの講義で学んだ知識が活きることを期待しています。

半年の講義が終わる頃には、図1にあるような綺麗なグラフィックスを描くことができるようになります。悪戦苦闘しながらも学生の皆さんは創意工夫を凝らして、すばらしい作品を作ってくれています。

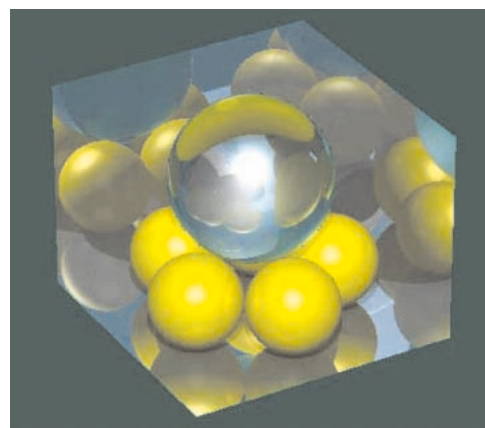


図1 グラフィック例（文献1より抜粋）



写真1 真剣に実習に取り組む学生の皆さん

おわりに

ところで、私は昨年9月から今年3月までスイス連邦工科大学ローザンヌ校に短期留学しました。写真2が同校のキャンパスです。窓からはレマン湖とアルプスの山々が見えるすばらしい環境で半年を過ごしました。私が滞在したミカエル・ウンサー教授の生体医療画像研究室では、C++と同様に最先端の言語であるJAVAを用いてCGを教えていました。私も近い将来、取り組んでみようと思います。高校生の皆さん、山口大学に来て、最先端の情報処理技術を一緒に学んでみませんか？

学内連絡先

TEL:0836-85-9561

E-mail: a-hira@yamaguchi-u.ac.jp

文献1 小笠原祐治, C++による簡単実習3次元CG入門, 森北出版, 2004.



写真2 スイス連邦工科大学ローザンヌ校のキャンパスと
レマン湖、アルプス山脈

私の研究

データベースシステムにおけるプログラミング



市川 哲彦 助教授

学術情報機構メディア基盤センター小串センター

主たる研究テーマはデータベースの高度応用に必要となるプログラミング環境の研究です。また、このところは情報可視化に関しての研究などアプリケーションよりの研究も行っております。いろいろとあるにはあるのですが全部は書けませんので、今回は少々古いのですが愛着のある研究について書かせて頂きます。

永続 Haskell

まずデータベースプログラミング言語 (DBPL) という概念から紹介しましょう。一般的にデータベースをアクセスするというとSQLが標準ですが、SQL自体は関係完備ではあるものの計算完備ではありません。要するにCoddが定義した関係代数の基本演算から構成されるすべての問合せに対して等価な文が存在するものの、Turing 機械で実現可能なすべての計算が実現できるのでは無いということを意味します。このことから、通常はホスト言語と呼ばれる汎用プログラミング言語と同時に利用し、計算能力の不備を補うという方法を取ります。

これに対して、よりスムーズなインテグレーションができないかという発想から生まれたのがデータベースプログラミング言語です。古いところで

はPascal/RやPS-Algol、比較的近いところではPersistent Java が有名で、プログラマからみると、OSやDBMSに頼らずに単一の言語でDBの操作ができるという特徴があります。

この研究は文字通りHaskellという言語をDBPLにしてみようというものです。Haskell は少々マイナーですが、計算の基礎理論の研究で有名な Haskell B. Curry にちなんで名前がつけられた関数型言語で、美しさには定評があるので、根強い人気があります。

この研究では、識別子を持つオブジェクトと明示的な更新命令を、関数計算の世界に入出力機能をエレガントに導入する方法の一つである状態遷移モナドを用いて導入しています。ただし、単純に導入すると、通常の状態遷移モナドでは更新だけではなく読み取り処理も命令的な逐次実行の対象となるため、不必要なデータベースアクセスが発生するという致命的な問題があります。そこでマルチバージョン同時実行制御機構を応用することによって、更新が逐次的に実行される一方で、データベースアクセスが通常の遅延評価方式に従って処理されることを可能にしています。

MWMD

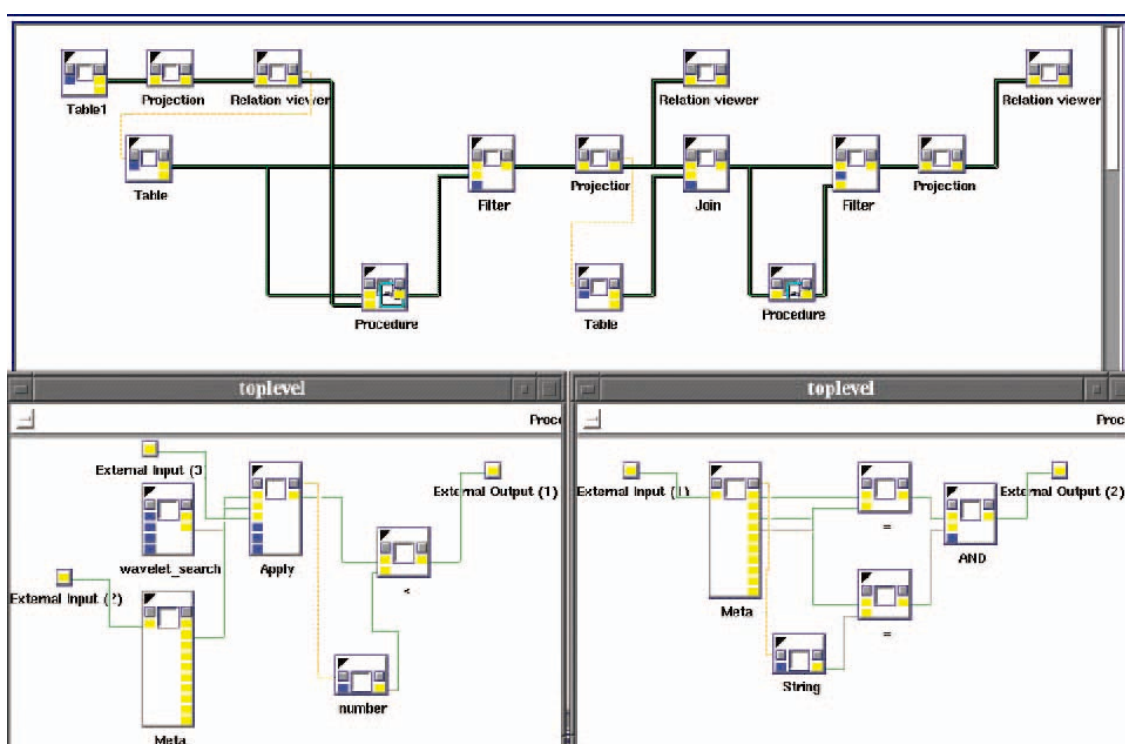
愛想の無い名前ですが、Module-Based Workbench for Multimedia Database Programmers and Usersの略で、マルチメディアデータベースのプログラムを“さくさく”と作れるようにするためのプログラミング環境です。まずモジュール型可視化環境 (modular visualization environment, MVE) の話をしましょう。1980年代後半から、科学技術データの可視化は研究の主要分野として発展してきたのですが、その過程で、従来のターンキー型の可視化システムではなく、可視化の基本機能のみをモジュールとして提供し、データフローパラダイムに基づく視覚的なプログラミングインターフェースを有するMVEが普及しました。このようなシステムでは、GUI を用いて、部品をライブラリから選び出してつなぎ合わせるだけでプログラムが組めます。

ところが、これらのシステムでは画像処理等に必要機能は兼ね備えているものの、処理対象となるデータベース部との連携については深い検討がなされていませんでした。そこでMVE の一つでソースコードも公開されていた Khoros と、オブジェクト関係データベース管理システムである

PostgreSQL を連携させることで使いやすいマルチメディアデータベースの利用環境ができるのではないかと考え、本システムを作成しました。

図に示したのは、Wavelet変換を用いた画像の類似検索を行うためのプログラムです。これを機械的に処理すると、問合せ最適化ができない、大量

のサーバクライアント間のデータフローが発生するという問題があるので、問合せの結果ではなく問合せそのものを次のモジュールに渡すという工夫をしております。これにより合成された問合せのみがサーバに発行され、処理が大幅に軽減されます。



学内連絡先

TEL:0836-85-2956 FAX:0836-85-2955

E-mail: ichikay@yamaguchi-u.ac.jp

私の研究

教育現象の理解の方法

関口 靖広 教授
教育学部数学科教育教室

子どもの数学学習の理解

昨年の暮れに、数学の学力に関する国際比較調査（PISA2003、TIMSS2003）の結果が相次いで公表され、日本の子どもの数学の学力低下が世論にぎわしました。その反響は大きく、文部科学省も「ゆとり教育」からの転換を加速させているようです。世界共通の問題を使って、各国の子どもの平均得点を比較するこれらの調査は、さながら国家間の順位争いのように報道され、その結果に政治家や教育政策担当者が一喜一憂したりしてしまいます。

マスコミの「学力低下」論にふりまわされて調査結果を眺めてしまうと、子どもたちが「できない」ところに無意識に注意が向いてしまいます。「最近の子はこんなこともできない」というように。しかし、教育者は、いつまでも「できないこと」を嘆くのでなく、子どもたちに「できること」を真剣に見直す必要があります。なぜなら、教育は、子どもたちが「できること」に基づいてしか進めることはできないからです。子どもたちがどんな知識を持ち、どんな見方・考え方・感じ方をしているのかを理解することが教育研究の基本だと思います。

教育の質的研究

教育現象は、複雑です。ペーパーテストの得点だけで、子どもたちを理解することはできません。当事者である彼らが実際に教室で学んでいる状況を間近に観察したり、彼らから直接話を聞いたりすることが必要です。研究者の「目」「耳」「口」でデータ収集をしなければなりません。そうして集められたデータは、コトバによる描写や、ビデオやテープによる映像や音声です。これらのデー

タを分析する方法はいろいろあります。たとえば、特定のコトバや行動が出現する頻度や時間を数値化して統計的に分析する方法があります。私が米国の大学院に入った頃、データを数値化して処理するそういう方法とは異なる「質的研究法」と呼ばれるものが教育研究で注目されていました。それは、当事者自身の見方・考え方・感じ方を重視して分析する方法で、文化人類学や臨床心理学などから影響をうけて教育研究に取り入れられたものです。私の今日までの研究は、ほとんどが米国で学んだ質的研究法を活用して進めたものです。この方法については、私のホームページで詳しく論じてあります。ご関心のある方はご覧下さい (<http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ysekigch/qualmtd.html>)。

日本の教育実践の理解

現在二つのプロジェクトに関わっています。一つは、中学校段階の数学について、日本の授業とオーストラリアの授業を比較するものです。各国の有能な教師3名を選んで、その教師の授業を10時間連続でビデオ撮りし、教師と生徒にインタビューをし、それらのデータを比較分析するものです。もう一つは、学校現場の「授業研究」について日本と米国の状況を比較するものです。米国の学校現場では日本のような授業研究はこれまで行われていなかったのですが、日本の伝統的な授業研究が最近米国に紹介されて、全米的に学校現場で授業研究の試みが始められています。米国の現場の先生方が行っている授業研究を視察して、日本の伝統的な授業研究と比較分析をし、それぞれがどのような特徴をもっているのか調べています。質的研究法は、こういう比較文化的な研究には適しており、興味深い結果が得られてきております。日本の数学科の授業や授業研究は、国内の議論ではあまり積極的に評価されていませんが、海外と比較してみると、素晴らしい実践であると改めて感じる点が多くあります。日本の教育のよさを大切にしてこれからも研究を進めていきたいと思っています。

学内連絡先

TEL:083-933-5341

E-mail: ysekigch@yamaguchi-u.ac.jp

教員から寄せられた著書

「防災授業 僕たち自然災害を学びたい！ 自然災害は、どうして起きるのかな？ どうすればいいのかな？」

((株)電気書院 2005年5月刊)



私は、「天災は忘れられたる頃来る」と言われたとされている寺田寅彦博士(明治11～昭和10年)を敬慕しています。寺田博士は、物理学者、随筆家であり、夏目漱石先生の高弟でした。私は15年前から、特に山口県内に軸足をおき、地震や集中豪雨により発生した土砂災害の現地調査を実施していますが、常に寺田博士の自然現象を観察する卓抜した姿勢を持つよう心がけています。

寺田博士は、昭和8年に「鉄塔」に寄稿された“津浪と人間”の中で次のように述べておられます。“…それで日本のような、世界的に有名な地震国の小学校では少なくとも毎年一回ずつ一時間や二時間くらい地震津波に関する特別講演があっても決して不思議はないであろうと思われる。…”この寺田博士の念願を少しでも叶えた気持ちは10年前から私の心に宿っていました。折しも、平成16年新潟県中越地震後、山古志村で起きた大地すべりと村の壊滅的な惨状を見て、さらに出版社の方との出会いが重なり、本拙書を執筆する運びとなりました。

本書は、日本ではじめてとなる小学高学年から読むことができるように工夫された自然災害・防災に関するものです。自然災害全般、さらに地震災害、津波災害、台風災害、高潮災害、集中豪雨災害、洪水災害、土砂災害、火山災害、雪崩災害の9つの自然災害の発生の原因と対応法および日頃からの備えについて、博士(著者)と翔太君をはじめとする仮の小学5年生10人が対話形式で学習します。図・表・写真・イラストが多く、専門用語はボードで説明し、さらに4年生以上で習う漢字にはルビを振っています。小学高学年生とご家庭の皆さんと一緒に読んでいただけることを期待しています。

山本哲朗 教授 工学部社会建設工学科

TEL:0836-85-9302 E-mail:tyamamot@yamaguchi-u.ac.jp



平成17年度公開講座のお知らせ

講 座 名	受講対象者	開設期間	時間帯
やまぐちサタデー・カレッジ2005 異文化交流コース「大人が読むグリム」	市民一般・学生	5 / 7～5 / 28 (毎週土曜 計4回)	15:40～17:10
やまぐちサタデー・カレッジ2005 外国語学習コース(英語)「アメリカ小説を英語で読む」	市民一般・学生	5 / 7～6 / 25 (毎週土曜 計8回)	14:00～15:30
やまぐちサタデー・カレッジ2005 日本文化コース「日本語の諸問題ー「誤用」と「ゆれ」を中心にー」	市民一般・学生	6 / 4～6 / 25 (毎週土曜 計4回)	15:40～17:10
やまぐちサタデー・カレッジ2005 現代文化コース「現代アメリカ社会と歴史」	市民一般・学生	10 / 8～10 / 29 (毎週土曜 計4回)	14:00～15:50
やまぐちサタデー・カレッジ2005 外国語学習コース(中国語)「中国語発音教室」	市民一般・学生	10 / 8～11 / 26 (毎週土曜 計8回)	15:40～17:10
やまぐちサタデー・カレッジ2005 やまぐち学コース「山口と吉敷郡に刻まれた中世史」	市民一般・学生	11 / 5～11 / 26 (毎週土曜 計4回)	14:00～15:30
「おくのほそ道」を読む	市民一般	5/7・21、6/4・18、7/2・16	14:00～15:30
韓国を知るー韓国の社会と文化ー※防府市会場	市民一般	5 / 21～6 / 25 (毎週土曜 計6回)	14:00～15:30
小麦栽培から始めるパンづくり	市民一般	6 / 1、8 / 24、11 / 9	10:00～15:00
「プロの技術で挑む小麦栽培から始める地産地消のパンづくり」	16年度公開講座「小麦栽培から始めるパンづくり」修了者	6 / 29	10:00～15:00
手作りおもちゃ教室	保育士・市民一般	7 / 23～7 / 24	10:00～16:00
2005年夏季小学校・中学校教員のための英語・国際理解指導者研修会	小・中学校教員、英語・国際理解教育指導者養成に関心のある方及び学生	8 / 2～8 / 6	10:00～16:00
理科実験講座	小・中学校教員	8 / 8～8 / 9	9:00～16:00
木工入門	市民一般 (小学生以上)	8 / 26～8 / 28	8:30～12:30
ヒューマンスクールー宗教と文化ー	市民一般	10/5・19、11/2・16・30、12/14	13:30～15:00
山口4億年史ー大地の恩恵と災害ー	市民一般	10 / 8～11 / 26 (毎週土曜 計8回)	10:00～11:30
健康講座(仮題)※防府市会場	市民一般	10月開講	未定
中高年者の健康づくりのための運動指導講座	地域で中高年者を対象に運動指導を行っている方	11 / 5	10:00～16:00
癌を知り、克服するために	市民一般	11月開講予定	未定

お申し込み・お問い合わせ

山口大学エクステンションセンター

〒753-8511 山口市吉田1677-1

TEL (083) 933-5150 FAX (083) 933-5154

E-mail: kyoutu@yamaguchi-u.ac.jp

新聞掲載された山大・地域から見た山大

2月

- ◆ 国公立大二次試験さようから
3大学で開場設営 (読売・朝日・日経:26日)

3月

- ◆ 教育・研究交流で提携 ー山口大と宇部高専ー
包括協定 単位互換や共同研究 (日経・山口:2日)

- ◆ **「声」**
竹林の拡大え土砂災害不安 ー大学教授 山本 哲朗氏ー (朝日:4日)

- ◆ **「みんなとの時間、宝物」**
生雲小・山大フレンドシップ事業
涙の感謝状授与式 (山口:8日)

- ◆ 1510人「春」歓喜 ー山口大ー
前期日程入試の合格発表 (山口・読売・朝日・毎日:9日)

- ◆ 山口大の挑戦 ー法人化から1年ー (サンデー山口:11日)

- ◆ 山口大吹奏楽部
第7回定期演奏会 (サンデー山口:11日)

- ◆ 13日にサイエンスワールド開催 ー山大理学部ー (山口:11日、サンデー山口:12日、山口:15日)

- ◆ **スマトラ沖地震雑感** **「寄稿」**
山大工学部教授・山本哲朗
津波対策、国境を越えて (山口:11日)

- ◆ 後期試験に計1252人 ー山口大と県立大ー (毎日・朝日・山口:13日)

- ◆ 時間の不思議がやってくる
情報センターで「時間旅行」展
「国内巡回」山口からスタート (サンデー山口:16日)

- ◆ きょうとあす
自主制作映画会 (サンデー山口:16日)

- ◆ 山大金管8重奏大舞台へ ー全日本アンサンブルコンー
初出場に向け猛特訓
「思い出残る演奏」 (朝日:18日)

- ◆ 響きわたる名演奏
21日、市民コアアサート (サンデー山口:18日)

- ◆ 山口大と県立大後期計757人合格 (毎日:24日)

- ◆ 福岡沖地震の現地調査報告
山大教授「防災対策を」ー工学部山本哲朗教授ー (山口:24日)

- ◆ 高機能センター開所 山口大ー
再生・細胞医療の先端へ (読売:25日)

- ◆ 山大卒業式2400人集立つ
「出会いが財産」 (山口・朝日・読売:26日)

- ◆ **「時間」を体感しませんか**
きょう、広中・毛利さん対談 ー山口大学時間学研究所ー (朝日・読売:27日)

- ◆ 優秀者は学費ゼロ
山口大、特別制度導入へ (朝日:31日)

4月

- ◆ 再生・細胞療法を一元化
山大病院にセンター開発 (山口:3日)

- ◆ 共通目標立て取り組み重要
山口大教育学部 野波健彦教授の話 (朝日:3日)

- ◆ 「人間力をつけ良い旅立ちを」
ー山口大で入学式ー (朝日・毎日・山口・読売:4日)

- ◆ あす、市民公開講座
家庭で行うペット管理 ー山口大農学部獣医学科主催ー (サンデー山口:8日)

- ◆ 留学生へ日用品セット ー山口の支援団体ー
山口の支援団体 山口大の58人に贈る (読売・朝日:12日)

- ◆ 山口大ロゴグッズ
ブランド化狙う ペン・色紙など8点 (中国:12日)

- ◆ 三菱化学と提携 ー山口大ー
白色LEDの寄付講座 (日経:13日)

- ◆ 県の若者就職支援センター
山大にも常設支所 相談にも対応 (山口:13日)

- ◆ **「寄稿 山口大学工学部教授・山本哲朗」**
竹林の拡大で荒廃化する森林の対策急務 (山口:15日)

- ◆ 「数学の楽しさを伝えたい」
山大・河津教授が講演会 (サンデー山口:15日)

- ◆ 地震の予知へ 観測網整備を ー山口大学教授 山本哲朗氏ー (サンデー山口:15日)

- ◆ 19日から4日間芸術祭
山大文化会6サークル (山口:15日)

- ◆ 月曜日インタビュー
山大医学部付属病院「女性診療外来」主任 松田昌子さん
女性医療を底上げしたい (山口:18日)

- ◆ 反日デモ ー山口大留学生 季海波さんー
ネットが扇動の一面
互いに譲歩が必要 事態深刻化の恐れ (朝日:19日)

- ◆ きょう、山口大学で「海女のリャンさん」上映会 (サンデー山口:20日)

- ◆ **「受講者募集」** 山口大学公開講座 (サンデー山口:20日)

- ◆ 山大留学生が一日外務職員に ー山口中央郵便局ー (読売:22日、山口:23日)

- ◆ 戦争 被爆者と考えよう
山口大できょう講演会 (朝日:22日)

- ◆ **新潟・福岡・千葉…頻発する地震**
山口にも危険性はある
市内に活断層を確認
ー山口大学理学部金折祐司教授 (サンデー山口:24日)

- ◆ 日韓大学生交流に意欲
13年目「アジア・カレッジ」
参加募集へあす訪韓 ー山大学生らー (朝日:27日)

- ◆ 夏休みジュニア教室16年
山大教授らに科学技術賞 ー知事に報告ー (朝日:29日)

編集後記

法人化2年目に入りました。初年度当初の慌ただしさは少しずつ減じたものの、落ち着き、自らの歩みを考えるとき、改めて大学が様々な立場の人から支えられながら成り立っていることを認識しはじめた1年でした。在学生や教職員はもちろんのこと、在学生のご家族、卒業生、そして地域企業、地域の生活者とのつながりが大切であり、この間の着実なネットワークが、大学成立の基盤となることを切実に感じるようになった次第です。

その主旨から、この第75号は山口大学の教員、職員、学生が地域に対して発している様々な活動を集め特集としました。山口大学には多才な人材がおり、地域に開かれたサロンがあり、学生の生き生きとした個性あふれる顔があります。様々な立場の人にそれを少しでも感じて頂ければいいと思います。そしてこの特集をきっかけとしてさらなる地域とのネットワークが広がることを期待します。

(坪郷 英彦)

©山口大学ホームページ<http://www.yamaguchi-u.ac.jp/>

山口大学広報第七十五号

平成十七年五月三十一日発行

編集発行 山口大学広報戦略委員会

(総務部総務課)

住所 山口市大字吉田一六七七一

電話 (083) 933-5007

FAX (083) 933-5013

E-mail sh011@yamaguchi-u.ac.jp

印刷 三共印刷

広報戦略委員会委員

大坂 英雄 (企画広報担当副学長)

小谷 典子 (人文学部 広報担当副学長補佐)

坪郷 英彦 (人文学部)

杉山 緑 (教育学部)

藤井 大司郎 (経済学部)

白石 清 (理学部)

武藤 正彦 (医学部)

三浦 房紀 (工学部)

山田 守 (農学部)

長畑 実 (大学教育機構)

瀧本 浩一 (産学公連携・創業支援機構)

糸長 雅弘 (学術情報機構)

杉井 学 (学術情報機構)

井上 重巳 (事務局)

仁科 幸雄 (事務局)